
バカと? (クロス) と異世界

吉井 明久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと？（クロス）と異世界

【Nコード】

N5664P

【作者名】

吉井 明久

【あらすじ】

バカテス短編集。自己満足の妄想巨編。それでもよければどうぞ。
（笑）

その1 アキま！（前書き）

短編集その1は、

『ネギま！』

場所は、6巻後半フェイトにディレイ・スペルをかけて、動きを封じたところから。

それでは、どうぞ。

その1 アキま！

巨大な光の柱が辺りを包む。

「オ、オイ！ 兄貴アレ！！」

「こ……これは！？」

稲光を伴って現れたのは、2つの顔と4つの腕を持ち、天を貫か
んばかりの大きさの巨大な鬼。

「ふふふ……」と天ヶ崎千草は不適に笑って呟いた。

「一足遅かったようすなあ？ 儀式はたった今、終わりましたえ」

「「なっ！？」」

「ハアッ…ハアッ……そ、そんな！？ ……こんな…こんなやつ…
……」

「つか、デカツ！！ オイオイオイ！ ちょっと待てよデケえっ！
！！ デカすぎるぜ！？」

ネギ・スプリングフィールドここに至るまでの戦闘と、フェイト・
アーウェルンクスを止める為に既にかなりの魔力を消耗していた。
ネギの焦りに拍車をかけるように、千草が告げる。

「二面四手の巨躯の大鬼……」

ごくりと、知らずネギは唾を飲み込んだ。

「『リヨウメンスクナノカミ』。千六百年前に討ち倒された、飛驒の大鬼神や」

大鬼神の顔の位置まで、意識の無い近衛このかと共に浮上し、千草は愉悅の笑みを浮かべた。

「フッフ　喚び出しは、成功やな」

千草が大鬼神を　チラリ　と見やる。

「身の丈が十八丈もあるって伝承やったけど……こいつはそれ以上あるわ」

千草がネギに向き直って構える。

「西洋魔術師の坊や。……どうするつもりや？」

「こ、こここんなの相手にどうしろつつんだよ!!」

肩のオコジヨ、カモが叫ぶ。動揺しているカモとは逆に、即座に攻撃体勢に入る。

「！　兄貴!？」

「完全に出ちゃう前にやつつけるしかないよ!」

「だけだよ!」

カモの言葉を見殺して、ネギは呪文詠唱を始め、

「ラス・テルマ・スキルマギステル!!」

手元が輝き出す。

「ウエニアント」

来たれ

“スピリトウス”

雷精

“アエリアーレス”

風の

“フルグリエンテース”

精……！！」

「うおおいつ！？ 確かに効きそうなのはそれしかねえが、兄貴の魔力はさすがにもう限界だろ！？ そんな大技、今もう一度使ったら、倒れちまうよ！」

それでもネギは、唱え続けた……願いを込めた呪いの文。^{いじは}

“クム”

雷を

“フルグラティオーニ”

纏いて

“フレットテンペスターズ”

吹き荒べ

“アウストリーナ”

南洋の嵐……」

さらなる輝きを増すネギの手元の光を見て、千草は焦りを顕にした。

「なっ…！ 何ッ！？」

“ ヨウイス ”

『 雷の

“ テンペスタース ”

暴

“ フルグリエンス ”

風…！！！！』

呼吸のできないほどの凄まじい風と雷を伴った魔力光が、大鬼神へと向かう。

「っ！？…」

目を瞑る千草に ズドオオオン…！！ と大気を揺るがす爆音と煙が包み込んだ。どうなったのかと、千草がうつすらと瞼を開けていくと…

「フ… フフフフ…」

「あ… っぐ…！！…」

千草から笑いが零れ、ネギは息を切らせて呻く。

大鬼神『リヨウメンスクナノカミ』は無傷だった。

「アハハハッ…！！」千草の高笑いが響き渡る。

「それが精一杯か！？ サウザンドマスターの息子が…！ まるで効かへんなあ…！！」

「ハアッ… ハッ、ハア… くっ… そおっ！…」

ネギは力を使い過ぎて、膝をついてしまう。

「このかお嬢様の力で、こいつを完全に制御可能な今！ もうな～んも怖いもんはありまへんえ！ 明日到着するとか言う応援も」

千草は両の手を広げて叫ぶ。

「蹴散らしたるわっ！ フッフ ……アッハハハハハハ！！！！」

「こ…このか、さんっ………」
「兄貴っ！ しっかりしろ！！」

ネギの背後から……ピシッ…パキヤアァン！ ガラスが割れたような音がした。

「…」

「善戦だったけれど……残念だったね、ネギ君………」
「フエイ…ト………」

（「マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ！！ これはマズイっ！ 何か打つ手は、何か………あああっ！！ そ、そうかつ！ 仮契約カードの！！」）

『姐さん！ 刹那の姉さん！ そっちは大丈夫か！？』
「カモ！？」「カモさん！？」

神楽坂 明日菜と桜崎 刹那は鬼達から逃れながら、カモに返事を返した。

『力を貸してくれ！ こっちは今、大ピンチだ！』
「今そっちへ向かってるわよ！」

巨大な鬼を目にしてからずっと全速力で走っている。そんな時にカモから突然言われた台詞に、明日菜は焦燥から苛立った言い方になってしまう。

『それじゃ、間に合わねえっ！ カードの力で喚ばせてもらっぜ！』
「喚ぶ！？」

カモは、明日菜と刹那に駆け足で説明する

「殺しはしない……けれど」

フェイトがネギへと歩み寄っていく。

「自ら向かって来たということは、相応の傷を負^{リスク}う覚悟はあるということだよね？」

（『カモ君！』）

（『兄貴、まだだ！』）

「体力も魔力も限界だね。よく頑張ったよ、ネギ君」

フェイトがゆっくりと手を伸ばしてきた。

（『やれっ、兄貴！』）

「くっ！」

「？」

ネギは空に仮契約カードを放った。

「召喚ッ！」

【エウオケム・ウォース】

ネギの従者

【ミニストラエ・ネギイ】

神楽坂 明日菜！！

桜崎 刹那！！

ネギの目の前に、六芒星の魔方陣が展開され、光りだす。と、次の瞬間には、中から明日菜と刹那が現出した。

「アスナさん、刹那さん……。僕……。すみません。このか、さんを

……」

「わかってる、ネギ！！ って！？ ぎゃああっ！？ 何よ

あれ ！？！？」

明日菜の絶叫を無視して、フェイトは表情を変えずに淡々と尋ねた。

「……それで。…どうするの?」「え? えつと……」

端から答えを聞く気はなかったのか、何の前触れも無く、フェイトは呪文を唱えた。

「ヴィシュ・タルリ・シユタルヴァンゲイト……」

「なっ!? これは、呪文始動キー!?」

「小さき王

八つ足の蜥蜴

邪眼の主よ……」

「!!!! 姐さん! 奴の詠唱を止め」

カモがこの魔法の危険性に気づき叫ぶが

「時を奪う

毒の吐息を」

「ダメです! 間に合わないっ!!」

刹那の悲痛の声が響き　そして、呪文は完成する。

『石の息吹!!』

【プノエー・ペトラス!!!】』

魔法煙が周囲を包み込んだ。

ネギ達を煙が呑み込む直前に、凜とした声と明るく力強い声が、ネギ達の耳の奥に届いた。

『闇の吹雪!!!』

【ニウイス・テンペスターズ・オブスクランス!!!!】』

『氷槍弾雨!!!』

【ヤクラーティオ・グランディニス!!!!】』

ネギ達が避難した先に、

「苦戦しているようだな? 坊や」

「ネギ君、大丈夫?」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと吉井 明久が、学校で会った時の気軽さで、ネギ達に声をかけてきた。

「エヴァンジェリンさん! 明久!」 「エヴァちゃん! 明久しゃん」 「明久、さん…までどうして?」 「バカの兄貴っ!」

みんな、思わず笑顔になる。

「あはは。言い辛いだろうから、呼び捨てでいいよ」

明久は噛んだ明日菜と噛みそうだった刹那に、そう告げた。

「いや、でも……」

「そんなことより、明久」

エヴァが鋭く目を細める。

「うん。あいつが朝倉さん達を石にしたクソやろうただね？」

「クソやろうって……」

「いいんだよ。　だけど、あいつ……強い」

「アハハッ！　さすがだな、明久」

「ありがと」

「解るか」

「うん。…でも、エヴァちゃんの方が全然強い」

「“ちゃん”付けするな、明久」

「ごめんごめん。解ったよエヴァ」

「よし」

鷹揚に頷くエヴァを見てから、明久は「さて…」と枕を置いてフ
イトに話しかけた。

「フイト君…だっけ？　待たせてごめんね？　待つてもらって悪
いんだけど、僕とエヴァが揃えばさ……史上最大最強で、　無敵
だよ？」

「……は？」「……」

「ぷっ！…　あははははっ！！　明久、真面目に何を言い出すん
だ」

ネギ、カモ、明日菜、刹那は、一緒になってすつとんきょうな声を上げるが、エヴァだけは爆笑していた。

「明久！ あいつはっ」

「ネギ君、解つてる。あんな形なりでもあいつは、全盛期の時の本気のエヴァと同じくらい強い。桜崎さんは、気づいてるかと思っていたんだけどね」

「すみません、まだまだ未熟です。私……」

明久の指摘で、少し落ち込む刹那にエヴァが自慢するかのように話す。

「桜崎刹那。貴様の未熟さももちろんだが、何よりも、明久がそれ以上に強大になったのだ。普段は大したこと無いのだが……」

「……だが……?」

「まあ、見ている。クックッ……」

エヴァが楽しそうに答えた。

「最強？ ま、吸血鬼の真祖だからね。強いのは、当然さ。何せ本物の化け物なんだから」

「! ……………」

フェイトの言葉に、明久の雰囲気が変わる。

「アイツっ!」

「あーあ……」

「あーあ……って、いいの!? エヴァちゃん!」

「いやいや。いいも何も、本当のことだからな」

「だからって!……」

「神楽坂 明日菜。黙って見ている」

「黙ってって!」

「それに、な……明久はな」

「明久?」

「ああ。あいつは、私が傷つくのを嫌い、傷つける者に対して怒ってくれるんだ」

エヴァは、本当に嬉しそうに話す。ここが戦場だということを忘れて、ネギも明日菜も刹那も、思わずエヴァの綺麗な微笑に見惚れた。

「あつ。だから“あーあ……”だったんですね? 明久を怒らせたから」

「その通りだ、坊や」

「エヴァ。こいつは、僕が倒すから、エヴァと茶々丸はあのデカいのを任せるね」

「力を貸そうか?」

「そうだね、パワーアップだけ」

「貴様に使うと反則としか思えんがな?」

「ははっ。まあその代わり、今度パエリアをご馳走するよ」

「ふふっ……好きなだけ魔力を持っていけ、明久。格の違いっていうのを見せてやれ」

「了解っ。my master」

明久が契約カードを取り出し、エヴァが明久に強化魔法をかける。

「契約執行

【シス・メア・パルス】

18000秒間!!!

【ウーヌスミリア・オクトーミレニアム・セグンダース!!!】

エヴァンジェリンの従者

【ミニステル・エヴァンジェリン】

吉井 明久!!」

「18000秒間?!?」「パートナー!?!」「契約したんです
ね」

「来たれ!

【アデアット!】」

明久の言葉と共に、アーティファクトである宝石の嵌められた、
サイズがぴったりの首輪が現れる。

「煌めきの輝石

【マギ・ストーン】」

「!」

明久の呪言にフェイトは、目を見開く。

「エヴァンジェリンさん! 明久のアーティファクトってまさか…

…」

「ククッ…坊やの想像通りさ。明久のアーティファクトは、
賢者の石【エリクシル】さ」

「「「なっ！？」「」」

「ははっ、おかしいだろ？ バカに賢者の石を与えるだなんて、神とやらも味なマネをする。」

ん？ ……始まるぞ」

明久が チラッ と刹那を見やった。

「桜崎さん、近衛さんをお願いします」

「あ…はい！」

「エヴァ、手助けしてあげて」

「解ったよ。貴様も気をつけるよ？ 石になっても治してやらんぞ」

「治せないんでしょ？」

「うるさい！ さっさと片付ける」

「ネギ君と神楽坂さんは下がってて」

「でも！ 明久一人じゃ……」

「大丈夫だ。信じて。エヴァの期待にも答えるし、君達も守ってみせる」

明久は、ネギの瞳をまっすぐ見て伝える。

「ね？」

「……………」

「ネギ。明久を信じなさい。アンタの兄ちゃんみたいなもんなんだから、弟が信じてやらないでどうするのよ？」

「え？ ……えっと……」

明久を伺うように見るネギの頭を、 ぽん と叩く。

「そうだね。 ネギ。僕に任せて」

「は、はいっ！」

「じゃあ、下がって」

「来るのかい？ ……では、相手をしよう」

「リク・ラク・ラ・ラック「リク・ラク・ラ・ラック」

呪文始動キー唱え始めた明久に、フェイトが高速で突っ込んでいく。

「ネギ、明久の声が2つ聞こえてこない？」

「え？ ……ホントだ。」

えっ！？ 2つ同時行使！？ でも、間に合わない！」

「遅いよ」

明久の至近まで迫ったフェイトが、腕を振るおうと構えた瞬間に、詠唱中だったはずの明久からさらに声が聞こえて、

「氷爆！」

【「ニウイス・カースス！」

「くっ！…」

（「三重詠唱！？」）

大量の氷を瞬時に出現させ、爆発させる。凍気と爆風による攻撃で、フェイトは明久から距離をとる。……が、フェイトは珍しく表情を大きく動かしていた。

「契約に従い

我に従え炎の霸王…

【ト・シユンポライオンデИАーコネート・モイ ホ・テユラネ・フロゴス…】」

明久の詠唱を止める為顔面への掌底に、鳩尾への肘撃ち、蹴り飛ばして…と攻撃を加えるが、

「ふっ！」

「ぐうっ!？」「来れ

【エピゲネーテートー】

浄化の炎

【フロクス・カタルセオース】」

明久の呻き声とは別に、詠唱の音が響く。

「がつ、ぐっ!……」「燃え盛る大剣

【ロンファイア・フロギネー】

ほとばしれよ

【レウサントーンピュール】

ソドムを焼きし火と硫黄

【カイ・テイオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ】」

「厄介だね……」。

ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイト…」

止まらない明久を強制的に停止させようと、フェイトも唱え始めた。

「罪ありし者を

【ハマルトートウス】

死の塵に

【エイス・クーン・タナトウ】
」

明久の一つ目の上位魔法が完成と同時に封印術式を施す。

『特殊術式

【アルティス・スペキアーリス】

“ 焰により灰塵と化す” リミット30 無詠唱用発動鍵設定。キ
ーワード“ 煉獄”

術式封印！

【ディラティオー・エフェクトウス！】
」

魔法を、ずらして発動することのできる“ 遅延呪文”（ディレイ・
スペル）の上位系である“ 条件発動”（コンディショナリイ）。遅
延させる魔法の発動条件に“ キーワード”を設定し、発動させる魔
法を唱える、または念じることで一時的に魔法を封印しておくこと
が出来る。設定時間以内にキーワードを唱えることにより封印した
魔法を発動できるが時間内にキーワードを唱えられなかった場合、
封印した魔法は無効となるが、強力無比の連携が可能。

キーワードを準備^{セット}しながらも、もう一つ唱えていた魔法も
詠唱を続ける。

「闇と炎の精霊66柱……

【ウンデトリーギンタ・スピリトゥス・オブスクーリー・イグニス……】」

「小さき王

【バーシリスケ・ガレオーテ】

八つ足の蜥蜴

【メタ・コークトー・ポドーン・カイ】

邪眼の主よ

【カコイン・オンマトイン】」

フェイトの詠唱を破棄させる為、明久は攻撃魔法を発動する！

『魔法の射手・連弾・闇と炎の66矢！！』

【サギタ・マギカ・セリエス・オブスクーリー・イグニス！！】」

暗い闇の炎が燃え盛る炎弾と化す。

66もの魔法矢を捌きながらも、フェイトは詠唱を止めない。
明久は、別の上位魔法の詠唱に入った。

「来れ、深淵の闇！！ 燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊っ！

【アギター・テネプエラ・アピユシイ・エンシス・インケンデンス
エト・インケンディウム】」

「その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ……」

【ト・フォース・エメーイ・ケイリ・カティアース・トーイ・カコ
ーイ・デルグマティ・トクセウサト……】」

「復讐の大焰、我を焼け、彼を焼け。其はただ焼き尽くす者

3つ目の魔法。今、明久の使える最大数。アーティファクト解放によるブースト。魔力強化というよりは、進化というべきか……

（「耐えろっ！ 後ろには、ネギと神楽坂さんがいるんだ！ エヴァアとも約束したじゃないかっ」）

明久は、石化しつつある身体に鞭打って、全てを出し切るつもりで言葉を紡ぐ。

「開け、冥府の扉。

現つに灯る蠢く、不死をも燃す灼熱よ。

焦炎の焰、無に帰す獄炎…。

世界へと降り注ぎ、蒼穹に染め上げろっ！」

爆炎と闇の炎が途絶え、代わりに、無数の蒼い炎が生まれる。

（「あれは不味い！ 人の身では解呪不可能であろう、僕の永久石化【アイオーニオン・ペトロース】に匹敵する。……いや、それ以上か？」）

蒼い炎の現界と共に、明日菜以外（離れていたエヴァや茶々丸に刹那、千草までも）が、息を飲んだ。

エヴァ自信、予想だにしていなかった。人の身で、“アレほど”のものを生み出すとは思ってもみなかった。というよりは、有り得ない。寒色系の色味が増すほど、炎の温度は高くなる。明久の出した炎は、人の身にあまる……まさしく、神のみ業。

「アスナさん、下がって！」

スの古い呼び名)の復讐に染まったものだとも考えられているんだ
った……か……明久が、な。……賢者の石は危険過ぎる。明久が
そこまで頭の回る奴ではなかったはずだ。戦っているあの刹那で、
蒼炎を生み出すなど、化け物　　っ！　だからか！？　あのアー
ティファクトが、噂程度にしか囁かれていなかったのは、これか……
……)

「茶々丸、刹那。時間が無い。明久にこれ以上、あの力を使わせる
わけにはいかん。急ぐぞ！」

「はい、マスター」「解りました！」

(「無事でいろよ、明久……。私の前から勝手にいなくなってみろ、
許さんからな……」)

その1 アキマ！（後書き）

これでおしまいです（笑）

少しでも楽しんでいただけたら、幸せ過ぎます。

その2 ガンパレード・サモナー（前書き）

短編その2は、

『ガンパレード・マーチ』

どの辺かは、想像にお任せいたします。

それにしても、また吸血鬼。なんか好きみたいです（笑）
少しでも楽しんでいただきましたら幸いです。

その2 ガンパレード・サモナー

「戦いごっこしよーぜ？」

「僕はね、」

「俺は蹴りとパンチがスゴいのな。んで明久が敵役な」

可愛らしい少年の言葉を飲み込んで活発そうな少年が主張する。

「やだよ！ 僕も剣とか使うのがいいよ！」

可愛らしい少年も男の子なのだ。そこは譲りたくないのだろう。

「えー。…じゃあ、魔法使いだったらいいだろ？」

仕方ないという風に言った活発そうな少年に、否定の言葉を返す。

「それもやだなあ…」

何言ってるんだよ！ と少年が力説していく。

「火とか雷とか出すし、召喚もできるんだ！」

「召喚？」

疑問を持った可愛らしい少年に向かって返答する。

「ドラゴンとかばぁーん！って」

「おお！ じゃあ僕召喚する！ 召喚っ！！」

少年の言葉と同時に、辺りが淡い光に包まれていった。

「「え？」」

二人は驚きに声を漏らした。

可愛らしい少年、吉井^{よし}明久^{あきひさ}を中心に、幾何学模様が足元から広がっていく。

明久の友達は恐怖に顔を引きつらせ、

「こっちくん！ 化け物っ！！」

転げるようにして見えなくなった。

「おいてかないでよ！」

暫く経ってから明久の声が聞こえた。「化け物じゃないよ……」
と風にさえ埋もれてしまうような弱さで。

俯いた頭に影がさした。

「…ん？」

何事かと顔上げると、思わず「はあゝ」っという息。言葉にならないということ身を知り、自分の目にしたものが信じられずに目をしばたかかせていた。

「これを行ったのは……あなた？」

「えっと…」

透き通るような月色の長い髪とエメラルドと見紛う輝きを持った瞳に白雪のような肌をした女性。

子供達にも解りやすく言うのなら、お姫様。と言えば伝わるだろう。言葉にすることができなくなってしまうほど美しく、神々しさを感じてしまいそうになる。

そんな女性に声をかけられてしまえば、男の子はどぎまぎする他ない。

「違ってたかしら？」

明久は、ブンブンブン。と思いつきり首を振る。

「……わわ、解らない。けど、なんか、で、出てきた」

「そう」

女性が目を窄めて尋ねた。

「わたしが怖い？」

「そんなことないっ！ あの…その…」

（「き、綺麗だから」）

明久が思っていたことを伝える前に女性が微笑む。

「ありがと。あなたはいい子ね」

よく解らないが笑ってくれ、褒められた。思わず明久は含羞む。

「わたしはカーミラっていうの。あなた、名前は？」

「明久。吉井、明久」

これは名案だとばかりに指を鳴らして、カーミラは悪戯っぽく笑う。

「吉井明久、契約を交わしましょ？」

「けーやく？」

「そうよ。不思議な力のある優しい人類に、あなた幻獣王が力を貸してあげる」

綺麗な顔が近づき

「あ」

明久の眼いっぱい彼女の顔が映る。

「っ！？ んっ」

カリッ。音が聞こえたかと思えば、痛みが奔った。だがそれは、すぐに驚愕が塗り替えた。

彼女の綺麗な瞳と自身の瞳が絡み合い、異性特有の胸の内をくすぐる香り…そのする近さと口内に広がる鉄錆の味と彼女の甘美な唾液が、嫌でも唇を重ね合っているのだと意識させられた。

「ごくり…」

お互いのものが嚥下する。えんか

「これで契約完了したわ」

「う、うん」

「うふふ…。初めてだったのね、悪い事したわ」

「い、いえその…嬉しかった、です……」

「ホント、真っ直ぐね。あなた人類方の成長を期待しているわ」

「???」

明久は訳が解らず、首を傾げる。

「気にしないでいいわ。けれども、あなたは化け物じゃないってことだけは、心の奥底にでも止めておいて頂戴。

じゃあね、明久」

「うん、解った。カーミラ、また会おうね」

「もちろんよ」

パチツとカーミラが片目を瞑ってみせると、明久は気恥ずかしくなって、顔を背けた。

その後すぐに顔を戻したが、そこにはもう彼女の姿は無かった。

ゆさゆさゆさゆさ……。誰かが明久の世界を揺らす。少しずつ開かれた隙間に白い光が入り込む。余りの眩しさに、明久は呻き声をあげた。

「ん……っ　んー……」

視界を覆うのは大きな猫。

「……ブータ？」

意識を手放していたのはどのくらいだっただろうか？

電子音が支配している小さな部屋に明久と大きな猫。それだけでそこはいっぱいになっていた。

明久の今いる場所は、巨大人型戦車兵器の中。世間一般的には、士魂号と呼ばれている。

だが、明久が乗っていたのは偶然の出会いによって並行世界から来たと思われる、未来からの贈り物。士魂号以上の力や稼働時間を持った士翼号。

士翼号は、フルアクションなら1時間保たない士魂号とは違って7時間も保つ。その為、戦場に多く駆り出される。

芝村　舞が「すまない。芝村として情けない……」なんて事を言うて俯いていたのは記憶に新しい。

（「芝村さんも壬生屋さんも本当に、申し訳なさそうにしてたな……」）

「僕がやれる事をやっているだけなのに。ね？　ブータ」

（『そなただけに背負わせる事が多く、悔やんでいるのであろう。』

あれは、高潔だからな』)

「そうだね。芝村さんも壬生屋さんも、ね」

士翼号の今の被害状況は軽微とはい難く、左腕を一本持っていない。かっている。

「はあ……原さんに怒られるなあ、これは」

愚痴を零しつつブーツの頭を撫でて、淀んだ空を見上げる。

寝起きだと言うのに微睡んだ目はしておらず、肉食獣のようなギラギラした明久の目。

何かを感じたのか、視線を下ろして目を細める。

地上だけでなく、空にも影が蠢く。

……そう。ここはまだ戦場なのだ。

その戦場に月の色が煌めいた気がしたのは、あの夢のせいかな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5664p/>

バカと? (クロス) と異世界

2011年10月10日05時14分発行